真宗大谷派（東本願寺）
桑名別院　本統寺

ご坊さんだより

第44号
発行所：桑名別院
発行人：長澤隆司
2025年8月

第59回 暁天講座

さる7月17日～21日まで暁天講座が開講されました。

初日、桑名市は局地的豪雨に見舞われ、観測史上最大の降水量となるなど、各地で冠水の被害が出る天候となりました。しかしながら、例年通り一〇〇人以上の方が連日訪れ、中には二〇〇人を超える日もありました。初夏の早朝より、たくさんのご聴講をありがとうございました。

また、暁天講座の実行委員をはじめ、教区の皆さま方よりご尽力いただき、長い伝統となる暁天講座を本年も無事開講できましたことを慶び、厚く御礼申し上げます。

本講座開講の挨拶にて、輪番は下記の句を詠み、次のように述べました。

「阿弥陀様（御本尊）は必ず、蓮の台、蓮華の上に立っておられます。そのことを想いながら、夏の早朝、別院の池に咲いている蓮華を眺めていますと、一つ一つの蓮華の上に阿弥陀様が立っていらっしゃるような尊い気持ちになりました。」

暁天の※はちすの華に 阿弥陀さま

さて、暁天講座の期間中、本堂にて聞法する、その私たちの御下にも蓮の華が咲いていたような気がいたします。

暁天講座（5日間）の内容につきましては、次号にて紹介いたします。南無阿弥陀仏

仏具のお磨き

さる7月3日、盂蘭盆会法要や、暁天講座の開講に先立ち、仏具のお磨きを行いました。

7月上旬はやくも猛暑が続く中でありましたので、エアコンがある聞光殿にて行いました。

合同清掃

さる7月9日、午前8時頃より3時間程にわたって、桑名組門徒会、また別院婦人会合同にて境内の草刈りなど清掃奉仕を行いました。

仏華講習会

さる7月16日、本年度第1回目となる仏華講習会を行いました。

前年度からの参加者を中心に夏季ならではの華立てを探究しました。次回は9月17日に開催予定です。詳細は▼

常連のメンバーには「桑名別院」と「個人名」の刺繍が入った共通ユニフォームを今後支給予定。別院華立を担う、新組織の構成を推進中です。

院議会（臨時会）

さる7月30日、桑名別院にて院議会（臨時会）を聞光殿にて開催。

現在計画策定中の「三重教区・桑名別院宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年事業計画（案）」について、桑名別院院議会議員より慎重審議をいただき、計画（案）は全会一致で可決となりました。

※はちす・・・蓮（ハス）のこと。花托部分が「ハチの巣」に似ているため、古くから呼ばれている呼び名。

「第44回 真宗公開講座」の講演について連載にて紹介いたします。（一部編集）

南無阿弥陀仏の呼び声 ③

大谷大学 学長
石川県小松市 宗圓寺 住職
一楽 真 氏

親鸞聖人は法然上人から教えられた「しょう名念仏」を非常に大事になされました。そして、この「しょう」を「唱」と書くと何回唱えるかという回数にこだわる人や、声に出すという音の話がどうしても優先されてしまうため、親鸞聖人は「しょう」を「称」としています。これは「かなう」という字でもありますね。あるいは「はかり」という字でもあります。だから仏様の眼をいただいて、何が本当に大事なのか。あるいは、こだわらんでもいいことなのかということを、天秤ばかりのように量っていくということです。私の心で量るじゃないですよ。仏様の眼をいただいて量った時に「ああ、私のものの見方、こだわるものではなかったな、もっと大事なものがあったな」ということを知らされた。これが「称名」だったんです。さらに、その時に「我が国に生まれると思え」という仏の呼びかけを聞くということでいえば、「聞名」という言葉も大事になさいます。さらにそれをいただき続けていくということでいえば、「憶念」という言葉でもおっしゃる。これら言葉はみんな違いますけども、言おうとしていることは、「阿弥陀の世界をいただきながら、一日一日生ききってください」という、こういうことです。だから、「私は称名を頑張っていますけど、聞名とか憶念は関係ないでしょう」というなら、これ、親鸞さんのお心にはかないません。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱えるということは、その阿弥陀さんからの呼びかけ、

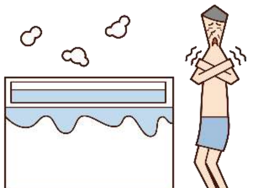
「阿弥陀の国を生きよ」
「阿弥陀なる命を生きよ」

という呼びかけを聞く、それが思い出すということです。

私も、昨日の晩に田舎から京都に戻って、今日は京都から来たので、今朝はそんな慌てなくてもよかったのに、いつもと同じような時間に目覚めました。目覚めた瞬間にね、「南無阿弥陀仏」とともに起きれたらいいんですけどもね。僕、ほとんどが「今日何時からやったっけ」と言って起きてしまいます。でも、そんな僕でもお内仏にお名号がかけてあって、それで「南無阿弥陀仏、ああ、いろいろ計らって、それに振り回されておるなぁ」ということを気がつかされるということもあります。まぁ、「南無阿弥陀仏」という言葉がなければ、この「阿弥陀の世界」を思い出すっていうことができるのかな、と私自身思うんですよ。

例えば「南無阿弥陀仏」なくても思い出せるんであれば、称える必要ないと思います。皆さんもね、試していただいたらと思いますが、明日目覚めた時に「南無阿弥陀仏」抜きにして阿弥陀の世界を憶念するということができるんであれば、なさっていただいたらと思いますが、難しいですよ。「今日は本願の世界を念じながら生きるぞ」そんな風に目覚めませんわ。でもそんな私でも、例えば朝トイレ行った時にでも、「南無阿弥陀仏」が出てくださると「ああ、これも当たり前じゃない」と。ちょっと病気するとね、出てくださるものが出てくださらない状態もありますからね。もっと言えば、心臓を打ってくださること、食べたものが体の栄養になること。当たり前じゃないのに、日頃は何の気なしに当然のこととして思っているからありがたくもなんでもないですね。

まあ、これも皆さんの話じゃなくて、私自身のことですが、ご飯のときに「いただきます」と言うや前に、「おお、今日は高級やな」とか、逆に「なんやこれ、昨日の残りやないか」みたいなことを思う。残りもの食べたからといって別にこの体どうかなりませんよ。ちゃんと維持されます。高級なもの食べたからといって、この体が高級になるわけじゃないでしょう。命をいただいていることを「いただきます」という言葉で確認しているはずなんですが、それが口ばっかりになると、命をいただいているということを忘れています。そういう意味では、「いただきます」の後に「南無阿弥陀仏」をつけ足していただくと、目の前の食事、絶対変わって見えます。今日の夜、ぜひとも実験してみてください。



お風呂入るのもそうです。暑いか冷たいか、それだけじゃないですわ。お風呂に入れることのありがたさ。それ一つとっても、特に冬は気をつけなくてはいけませんが、本当にそうやって体がちゃんと保たれていること自体のありがたさ。そんなことを思い出すのも、「南無阿弥陀仏」という言葉がなかったら、わたしたち憶念することすらできないんじゃないでしょうか。

いつでもどこでもいただき続けておられたのが、さっき申し上げた法然上人の七万回の念仏。そこで親鸞聖人は「法然上人は口でたくさん唱えていたように見えるかもしらんけど、それだけじゃない」っていうことを私たちに教えておられます。一声一声、もう四六時中、称え続けたんです。つまり、阿弥陀の世界をいただき続けておられた法然上人、それが親鸞聖人にとっての法然上人のお姿だったと思います。

実際、29歳で入門なさって、35歳に流罪にあってお別れになりますね。法然上人は四国に、親鸞聖人は越後（今の新潟）に流されます。これが永遠の別れでありました。でも、私は思うんですよ。越後に行って「南無阿弥陀仏」と称えるところには、法然上人のお声が耳の中で響いていたのではないか。称えているのは自分かもしれません。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…その時に法然上のお顔も出てきたかもしれません。おそらく声も聞こえていたと思います。これもどうですかね。皆さんの中にも、どなたかのご縁でお念仏いただくようになったとすると、あの人はよく称えていたなとかね。あの方、よくお寺にお参りしておられたなとかね。そういうことを思い出されること、あるんじゃないですか？あるいはお友達でもね、遠くに離れることがあったとしても、「南無阿弥陀仏」の中で「あの人、今どうしてるやろうか」ってね、その人が出てくるかもしれません。

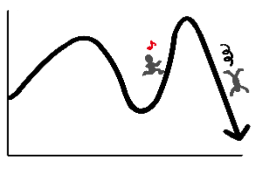
「南無阿弥陀仏」

という言葉はたったの六文字ですけれども、そのことを通していただける世界が、ものすごく前のことであれ、遠いところであれ、たくさんのことあるんじゃないでしょうか。だから親鸞聖人は越後に行かれて、その後、今度関東で20年生活なされますが、お同行とのお念仏の生活の中にも、法然上人はずっと働き続けておられたと思います。

これちょっと自分のことなんで、恥ずかしい話でありますけれども、私は石川県でお寺に生まれるというご縁をいただいたんですけれども、長年そういうことを喜ぶことはできませんでした。

特に反発したのは中学、高校ぐらいですね。（僕は9歳で得度しましたが）小学校の時は、父の代わりにお参りに行くと、えらい可愛がられたんです。父だったらお布施を預かって帰ってくるだけですが、僕は加えて子供用のお菓子までもらっていまして、お参りに行くのが小学校の時は好きだった。でも中学になって図体でかくなるでしょう。もう可愛くもない。そしたら特別にお菓子ももらえない。ずっと可愛い可愛いって言われていたら、僕はそのまま行ったかもしれませんが、誰も褒めてくれない。やって当たり前ですね。一番引っかかったのは中学三年生ぐらいの時に、一人のお同行、門徒のおっちゃんから、この人はもう亡くなられましたけど、非常に親しいおっちゃんでしたけれども、こう言われました。

「坊さんはええなぁ、ちょっとお勤めしてお布施もらって帰れるんやから」と。グサッときました。おっちゃんも決して悪気があったわけではないんですよ、だから今その会話がなり立てば、「そんないいと思うんなら変わりますか」と言うと思います。そんなこと中学生だから言えなかったんですよ。それで人からこんなこと言われない仕事に就くぞと思って、わざわざ高校では理数系に進んで、とにかく飛行機でも作ろうと思って、物理が好きやったから、そんなこともしていました。でもまわりまわって、結局、大谷大学で仏教を勉強するようになったんですけど。だから決してスーッと仏教に縁を持ったわけじゃないです。



で、今も思い出すのは小学校の四、五年の時だったと思いますが、祖母がとにかく念仏する人でした。そのおばあちゃんといっぺんチャンネル争いになりましたね。夕方やったと思います。僕が見たかった漫画もあるんです。ばあさんも楽しみにしとったドラマがあったらしいですわ。

「1週間、これ楽しみにしとったんや」と僕は言った。ばあさんは仕方ない。孫に譲ったわけですわ。ほんで漫画始まったんですけども、ばあさんが隣で

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」

そしたら漫画に集中できないです。だから、「ばあさんうるさい」と言いました。

今ね、僕は六歳と四歳と一歳の孫ができまして、おじいちゃんです。孫から「うるさい」って言われたらグサッとくると思いますね。自分に孫ができて、そんなこと言ったことをまた思い出す。ばあさんはあの時どんな気持ちやったかなと思います。ばあさんとその後、直接その題材で喋ったことはありませんけれども、私の中に残っているんですね。その念仏に対して、子どもながら、「あんなこと言って何になるんやろう」と思っていましたし、「なんか不思議な呪文やな」と思っていた。「なんか意味があるんかな」いろいろ思った。結局、そのことで私が大谷大学に行って「南無阿弥陀仏」ってなんやろうか、唱えて何になるんやってことを尋ねずにおれなかったんです。その意味で念仏に対する疑問。

これは隣で念仏する祖母がいたからなんですね。もしかしたらの話ですけど、私が大人になるまで念仏する人が隣にいなかったとしたら、私は「南無阿弥陀仏」の意味を考えるちゅうことも起きなかったかもしれません。まあ、僕の場合、反発ですけどね。反発でうるさいと言ったわけですけども、それすら出てこなかったかもしれない。

その意味で言うと、「南無阿弥陀仏」は祖母の声ではあったんですけども、今思えば、

「お前はどっち向いて生きてるんや」
「阿弥陀の世界を大事に生きよ」

という（まあ、祖母はそんなつもりで言ってるわけじゃないですよ、祖母が自分でいただいておられるわけですけれども）僕にとっては

《仏からの呼びかけ》

という言葉であったことは間違いないです。だから、人が称えた念仏でもドキッとしたり反発したりするという。そこに、日頃にはないものが動くじゃないですか。だって世間では「南無阿弥陀仏」なんてなかなか聞きませんもんね。どうやって早く結果を出すか、今は本当に効率主義です。学生と喋っていても、コストパフォーマンスとかタイムパフォーマンスとかばかりです。例えば、このうどん屋はコスパがいいとかならまだいいですよ。値段のわりに味がいいとか、そんな話でしょう。でも、それがものの見方、考え方がくっついていくにつれて、最後はあの人間はコスパがいい。その人間はコスパが悪いとか、人のことまで量ります。ええ、そういう効率主義、結果主義。もっといえば経済の利益主義ということで量れるでしょうか。まぁ、それで量らないとならんお仕事ももちろんあります。それは否定しません。そっちの方がバンバン小さな子供たちの頭にも入りますよ。でも、その中で結果が出ないようなことは価値がない、お金につながらないようなことはやっても無駄だと。

そんなことばっかり聞いて
育っていいんでしょうか。

その時に

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

人間の物差しでは量れない世界があるぞということを直接、孫にしゃべれるかどうかわかりません。伝えれるかどうかはわかりませんけれども、なんかじいちゃん言うとったなぁということだけでも、引っかかりが出るというのは、「南無阿弥陀仏」そのものの力だと私は思います。だから意味がわかるかわからんかは後の話です。まずはその響く「阿弥陀仏に南無せよ」という言葉。翻訳すれば「帰命無量寿如来」という言葉。これに触れるかどうかが、人生を見ていく、世の中を見ていく、大きな目の付け所の違いになると。

そういう意味では、勝ったか負けたか、得か損かはこんなことわざわざ教えなくても、子どもたち保育園で学んできますよ。いいか悪いかで全部学ぶ。これはこれで学ばないといけないです。世間で何が褒められるか。どうやったらいい子と言われるか？どうやったら一番になれるか。これはほっといても学ぶ。しかし、

それで量れない世界がある

ということは、これ仏法しか出遇えないと思います。そういう意味で、先に生まれたものはね、後を導きなさいという親鸞聖人のお言葉がありますよね。これ先にご縁をいただいたものは、そのことの大事さを後の人にどうぞお伝えくださいという親鸞聖人のお言葉だと思います。

それが初めに申し上げていましたが、親鸞聖人ご自身も後に生まれたものとして、先に生きられた方々の人生に尋ねていかれます。お釈迦様を筆頭に、龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空です。その間に聖徳太子もありますけど、そういう方々の生き方を念じながら、じゃあ自分はどうするのかということを考えていきます。それ、同時代の周りばかりを見渡していたら、誰が儲けたか、誰が大きな結果を出したか、そればっかりになりますわ。でも、そんなことで見える、見えている世界は薄っぺらいです。そんなもので一人の人間の人生を決めつけるなんてことはありえない。本当はできない。でも、そうでないことの方が全体を覆い尽くしている時代でありますので、だからこそ、この念仏の呼び声をいただいてく、この大事さを私は思うのですね。

途中でも言いました、もう一回繰り返しますが、今日、阿弥陀を念じたら、もうあとは大丈夫だとはなりません。あっという間に私自身も世間の物差しに引きずられる、飲み込まれる、そういう危うさを持っています。でもそれ、

危うい人間だからこそ、いよいよ阿弥陀の世界をいただいていく

確認していく。これが南無阿弥陀仏ですね。それで私自身が南無阿弥陀仏と声を出して称えるのも、私の声でありますけれども、これは私の声を通して阿弥陀が呼んでくださっている、如来様からの呼び声なんですね。だから10回称えたということは10回呼んでもらったということです。まあでもそれが届くか届かんかは日によります。やっぱり僕も称えているからといって、いつでも「ああ、本当やな」っていただいているというわけにはちょっといかない。

うちの地方では年末に一軒一軒、報恩講を勤めにお参りするんです。自分に限っては1年にその一回しかお参りにいけないところもあって、一日に何軒か参ります。そうするとなにが起きるか。「南無阿弥陀仏」って言いながら、「次は何時やったかな。」って根性が湧くんですよ。遅れたらいかんってのもありますけど、南無阿弥陀仏が私に対する呼び声なのにね、その阿弥陀仏の世界をいただくんじゃなくて、世間の時間の方

に縛られて、南無阿弥陀仏と言いながら時計を見ているっちゅうことがある。

おぞましいもんですよ。だから「南無阿弥陀仏」、「本当に阿弥陀の世界を生きてくれ」という呼び声として届くというのは、「いつでも必ずそうなります」とはこれ言えません。でも届く時もあります。「また自分の望み方を最優先して、それで値段をつけて生きとったな」ということです。

途中でも言いましたが、今日の晩御飯はぜひとも「いただきます」に「南無阿弥陀仏」を言ってみてください。おそらく目の前のお食事が輝いてみえると思います。

値段ではありません 命を頂戴しています

それを頂戴して、またこの命を何に使わせてもらうのかということを確認させてもらえる、そういうことになると思います。（完）

★以上、「第44回 真宗公開講座」の講演内容（一部編集）、また下記は、質疑応答の内容となります。

★次回「第45回 真宗公開講座」につきましては、「三重教区・桑名別院 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十・立教開宗八百年慶讃法要」の厳修、また「慶讃事業」の実施予定に伴い、来年中をお休みとし、再来年での開講を予定しております。

質疑応答

聴講者（質問）

よく質問をさせてもらうことですが、「ただ念仏」っていうのに対して、ちょっと疑問があって、「本当に救われたい」と思うなら、確かに「ただ念仏」よくわかると思います。でも「救われたい」と思ってないときに、阿弥陀さんから手を出してもらっても、しがみつく気にはならないと思うんですけども、そこら辺はなにかご存知ですか。

ありがとうございます。おっしゃる通りで、本当に救われたいっていうようなことが私の中から出てくるかということなんですが、出てこないんですよ。で、今日「たすかる」という字で「助」の字と「拯済」という字を書かせていただきましたけど、私たちが助けてほしいっていうのは大体「助」の方で、助かることを思い描いている。そして、まずまずいっている時はその「助」すらいらん、人の手助けはいらんと思っていますから、ましてや阿弥陀さんのおはたらきはいらないですね。それで、南無阿弥陀仏申せというのは、そのことを破るような形で来るんです。つまり、「助」を願っている私たちに、こんな世界があるのか、想像もしていなかったという形でやっていきます。だから救われたいと思うときも多くは「助」の方の話で、本当に救われたいなんて思わない私たちが阿弥陀にふれてみる、これは聞法しかないんですけども、ふれてみると、こんなものの見方、こういう世界もあったのかということを知らされて、初めてこの世界を頷くとか、同感するということが起きるということですね。だから本当に救われたいと思うこと自体は私の中から出てこない。

そうですなあ。でもやっぱり溺れとるものが何かにつかまろうとするのはわかるけど、溺れていないのにつかむことしないと思う。

それが阿弥陀さんから見ると、あるいはお釈迦様から見ると、みんな世間の勝った負けたにもう溺れきっているんです。溺れているつもりがないだけで。
だから悪人と言われてピンと来るかどうかも大事なんですけど、みんな悪人やって言われているんです。

そうは思いませんなぁ。

そうなんです。それを「悪人ですよ。だからすくいますよ」と言っているのが仏さんなんです。一つだけ例を言いますと、親が子どもを育てる場合でも一生懸命ですよ。でも、ややもすると自分の思いに一生懸命ということがあるんですね。自分の枠組みにはめることに一生懸命ってことは、はまった子供は「よう育った」といい、はまらんかったら「なんでこんな子がうちにきたんや」という。つまり育てるということをしながら、親も子も傷つけ合うということが起こったりするんですね。そうなっとることにぶつかると、「あぁ、悪人という言葉が私のことをやった」と響いてくることもあります。でも、ある程度うまいことといっとると、悪人と言われても「あ、私は悪人じゃないから、救いはいりません」となるんです。これが親鸞聖人が「難中之難無過斯（難の中の難、これに過ぎたるはなし。）」つまり大事な教えなんですけども、それを我がこととして受け止めるのは本当に難しいとおっしゃる意味なんですね。だから親鸞聖人ご自身で言えば、今日お話しましたが、比叡山で修行ができている時には、阿弥陀さんにすくわれるなんて思ってないです。でも、それが立ち行かなくなったというか、今おっしゃった例えでは、溺れているということがどっかに感ずるということがないと、阿弥陀には行かないですね。

でも、本当は溺れてるんです。こういうふうに呼びかけられています。

（溺れていないのに溺れているとは…）困ったものだと思いますけどなぁ。

つまりは困っていないのです。しかしながら、私自身もこうしゃべっていると、なんかいつでも阿弥陀さんをいただいたように見えるかもしれませんが、忘れていることの方が多いですから、そういう意味では
本当は困ったもんなんです。本当になんもなくても生きていけるぐらい思ってるんです。ややこしいです。
でも、それは危ういぞというふうに呼びかけられているということなんですね。

信じる心でいえば、信心は人に聞かしてもらうと０か１０か。こういうことを言われる人がおります。
99%でもいかんし、10%でもいかんと。でも 100%で信じるっていうことはできるものですか。

ありがとうございます。大事な話で一個だけ言葉紹介しますと、信心と書くとね、今おっしゃるように私が信ずるというように聞こえますが、親鸞聖人は信心を信知という言葉でも書かれるんですね。これははっきり知りました。本当に知りましたということです。知らされた、あるいは気づいたんです。危ういぞと言われているのになかなか感じられない、でも感じる時もある。感じた時は危うい自分に気がつかされたということです。でもまた元に戻るんで、まあそれでもええかとゼロに戻ってしまうということです。でも知らされた時は「あ、これ私のことやった。悪人とか危ういというのは他の誰でもない。この私のことやった」というように知らされた時は１０です。だから危ういというふうに思い込みましょうというより、はっきりと知らされました、気がつきましたというのが 10 の世界だと思います。で、これは昨日知らされても、今日また元に戻るんで。だったらもう一遍、その阿弥陀の世界をいただきなおしていく。これが毎日毎日念仏しなさいという意味なんですね。

一瞬？

そう。一瞬です。やっぱり信の一念っていうことなんです。一瞬だけです。よくあるのがね、例えば、親鸞聖人は「愚かな自分」とおっしゃるんですが、真宗は「愚かな自分」に気がつくことやといっていて、そこまではいいんですよね。でも知らされた、ああ、愚かやなって感じた。そこ本当、一瞬ですよ。次の瞬間、何が起こるかといったら「気がついただけ、あいつよりましや」みたいな感じで、またゼロの世界に戻ってくんですよ。威張る世界に戻ってくる。知らされたのは一瞬、ずっと続かない。また戻るから、またその知らされる世界に帰っていく。この往復運動みたいなことが、日々の念仏の生活なんですね。だから日頃はほっといてもゼロの方にいるわけで、世間真っ只中なわけですから。でも知らされれば、これ危ないんじゃないか、こんなことといつまでもいっとったらあかんのじゃないかって知らされて、でもまた「知らないわ、世の中はそうやから」みたいになって。往復運動です。でもこれを法然上人は一日 ７ 万回なさっていたっていうのがすごい話で、阿弥陀の世界をいただき続けようとしておられたというのが７万回という数なんです。

どうもありがとうございました。

訃報

2024年12月23日
桑名別院 報恩講

6月29日、池田勇諦氏（三重教区桑名組西恩寺前住職）がご逝去されました。90歳でありました。

7月3日19時より西恩寺にて通夜、7月4日11時より西恩寺にて葬儀が執り行われ、喪主の池田徹氏（西恩寺住職）からのお話では肺がんが脳に転移したことによる脳腫瘍が原因であったということです。

通夜・葬儀には全国から多くの参列者が集い、別れを惜しみながらも、それぞれが恩師からいただいた恩徳を胸に、また共に学んだ同志との再会に、多くの願いを確かめ合い、共有する場が生まれていたように思います。

桑名別院におきまして、最後にご法話をいただきましたのは、昨年12月23日の「桑名別院報恩講」御満座の法座となります。晩年、持病を抱えながらも1座でも多く、一人でも多くの方とお互いに法座のご縁が結ばれますようにとご尽力いただきましたことと拝察いたします。

1934年生まれ。大谷大学大学院修士課程修了。
真宗大谷派講師であり、教学を管轄する董理院院長。宗務顧問。
同朋大学名誉教授。三重教区桑名組西恩寺前住職。

池田勇諦氏 X 桑名別院

池田勇諦氏と桑名別院の関係は とても深いところにあります

池田勇諦氏は4歳頃のときから、桑名別院の法座へ参ることを日課としていた祖母の手引き役（視力を失っていたため）として、自身も桑名別院へ毎日お参りすることになります。

そして、町に戻っては、「今日の法座はどんな話であったか」と聞く者に対して、法座の内容をまるまる覚えていて伝えたり、解釈を説明してみせたり、その頃からすでに説法が始まっていたといいます。（そのことで、言葉は適切でないかもしれませんが、周りは「神童」と呼んでいたとか…）

勇諦氏自身も、そのこと（桑名別院が生活の中にあったこと）が、仏教に出遇わせていただいた出発点、仏門であったと、桑名別院へ来院の折には何度も語られ、常に深謝しておられたのを覚えています。その特別な思いは言葉だけではありませんでした。

一つは桑名別院での報恩講御満座の法話を20年以上、また第50回の節目となる暁天講座の最終日や真宗公開講座（1990年・2007年）など、様々な場面でご法話をいただきましたが、その度に法礼のすべてをそのまま懇志として別院に納めておられました。対応をした者が恐縮していると、「法話ではわたしが学ばせていただいておるのだから」と力強く言葉をつけ加えておられたお姿も深く印象に残っています。

もう一つは、このたびのご葬儀に対するご香儀を真宗大谷派本山、桑名別院、同朋大学に納めてほしいという本人の願いがあったとのことで、葬儀後に西恩寺住職様より教化のために使っていただきたいとの願いと共に多額の懇志を賜りました。

それらのお姿を真似しようとも、真似すべきとも言うわけでなく、そのお姿に何を感じて、受け取り、知ることができるか、そこに重要な気づきがあるような気がいたします。（編集）

御礼（西恩寺HP）

本誌1ページの暁天講座のご報告に戻る形にもなりますが、三重教区会議長の員辨暁氏（員弁組圓光寺住職）が、第59回暁天講座閉講の挨拶にて紹介されておりました、桑名別院報恩講での池田勇諦氏の質疑応答場面の言葉をひとつ紹介いたします。

質問者
「念仏してどうなりますか」

池田勇諦氏
「変わるようで変わらない。変わらないようで、変わる。」

最後に、前年度報恩講での法話概要（編集者の受けとめ）を再度掲載します。

南無阿弥陀仏

命より大切なものはないということも一つ事実ですが、自我で生きる私は、命より大切なものに出遇わなければ命そのものを無駄に、無為にしてしまうのです。

仏法が深まるとは、問題が深まること。個の存在としての本来の私（方便法身）から呼びかけられる阿弥陀仏の本願を、私たちは聞いているか、聞く身になれたか、聞こえたか。

2023年12月23日桑名別院 報恩講

８月の行事予定

法話(又は講演)のご案内

◇ 人生講座　会費 500 円

８月３日（日）　7:00 ～ 8:00

講師　**渡邊 誉**氏

（多度町 西願寺 衆徒）

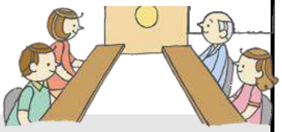
※毎月第１日曜日開講。
９月７日(日) 講師 石川 加代子 氏（多度町 西方寺 坊守）

◇ 同朋の会 【正信偈のことばにふれる⑮】

８月８日（金）13:00～15:00 会費 500 円

講師　**長澤 隆司**

（桑名別院 輪番）



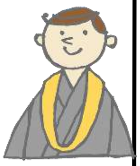
※　毎月第一金曜日開講。
次回９月５日(金) 講師 長澤 隆司（桑名別院 輪番）

◇ 桑名別院法話のつどい

８月１３日（水）13:00～15:00

講師　**星川 佳信** 氏

（菰野町 大圓寺 住職）



◇ 親鸞聖人御命日のつどい

８月２８日（木）13:00～15:00

講師　**岡田 豊** 氏

（鈴鹿市 傳善寺 住職）

◇ 晨朝法話

毎朝　7:00 からの勤行後
法話　別院列座（１３日、28 日の御命日は輪番）

法要(お勤め)のご案内

◇ 晨朝（おあさじ）　毎日 7:00～

◇ 祥月経　毎日 9:00～

毎月 13、28 日は 13:00～、31 日は前日に兼ねます。
また、今月 15 日、16 日は前日に兼ねます。

他の時間に祥月経をご希望の方、
または年忌等、各種お参りをご希望の方は
寺務所までお問い合わせください。

◇ お夕事　毎日 16:00～

◇ 御命日のお参り

先門首　13 日 / 親鸞聖人　28 日

前　日：13:00 より逮夜
御命日：7:00 より晨朝、9:00 より日中

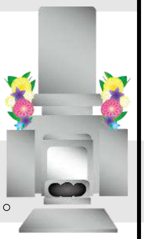
◇ 御歴代御命日

８月１３日(水)　證如上人 第 10 代

前　日：13:00 より逮夜（先門首の法要と兼ねる）
御命日：7:00 より晨朝 9:00 より日中（〃）

◆ 墓地総経

８月１３日(水) 13:00～（兼祥月経）



本堂にて、境内墓地の総経をお勤めいたします。
ぜひとも、お盆のお墓参りと併せてお参りください。

その他（８月の予定）

▶ 会議について、該当者にはすでにご案内をお送りしております

◆ **婦人会清掃奉仕活動**
８月６日(水) 8:00~10:00

◆ **福島プロジェクト（8月16日～21日）**
8月18日～21日 別院宿泊 18日夕食づくり（別院婦人会:有志）

▶ **暁天講座実行委員会（反省会）** 会場:庫裡
8月 21日(木) 14:00~16:00頃まで

慶讃 ★ **夜間参拝 & ライトアップ**
ナイトマルシェ & ワークショップ

8月 29日(金)、30日(土)　18:00～21:00 頃

両日、桑名別院前の寺町商店街にて開催予定の
イベント「びっくり夜店」に併せて、桑名別院も夜間
特別参拝、境内のライトアップを実施します。
また、本年は教区・別院の慶讃事業として、境内に
てナイトマルシェ、ワークショップが行われます。
商店街では教区仏青による「ぼうずバー」も☆

お知らせ

◎ 別院事務所お休みについて

8月12日(火)～15日(金)まで別院寺務手続きは
お休みとさせていただきます。※土日祝日もお休み

◎ 今後（９月の予定）について

9月　4日(木)仏具のお磨き
10日(水)婦人会清掃奉仕活動
17日(水)仏華講習会
20 日(土)~26 日(金) 秋季彼岸会法要

LINE @106ihhaj

真宗大谷派（東本願寺）
桑名別院 本統寺

住所 ▶ 〒５１１－００７３ 三重県桑名市北寺町４７番地
寺務所の開閉時間 ▶ 平日(土日祝以外) 9:00～17:00
TEL ▶ (0594)-22-0652　FAX ▶ (0594)-22-0681
メール ▶ kuwanabetsuin@gmail.com